

地勢的視点から 東アジアをとらえることが重要

龍谷大学国際文化学部 濱下 武志 教授

歴史認識研究会（座長 森下俊三・小嶋淳司両代表幹事）は、龍谷大学国際文化学部の濱下武志教授を招き、「アジアの中の日本・韓国・中国一日韓歴史家会議の討論を踏まえて」と題して講演会を開催した。以下要旨。

歴史をどうみるか

歴史と歴史認識の関係について考えると、歴史は客観的事実であるという三人称でみる見方と自分が歴史をどうみるかという一人称での見方が従来から言われている。それに対して、私は、相手の存在を前提として自分があるという、相互のコミュニケーションを重視した二人称の歴史という見方で考えたいと思っている。

東アジアの歴史秩序

東アジアの歴史秩序である「朝貢－冊封」体制、華夷秩序を一つの文化的な問題としてどう考えるかが歴史の一つの課題となっている。現在でも、地勢論的にみて一つの地域秩序が東アジアを構成していると考えている。

中国の皇帝が同心円の中心におり、そこから周辺に地方の省、西北にいくとモンゴル・チベットのような地域と続く。外に行くに従って、統治が緩やかになっていくが、一番外側の帯のところに一番重要な朝鮮が位置する。日本も明の中期までは、中国と朝貢貿易を行っていたが、その後、対等な貿易国にかたちを変えた後、鎖国というかたちをとった。中国のダイナミズムによって中国が閉じたり、開いたりすることに対応して、周辺地域は、中国を大きな市場として利用したり、影響を切るため関係を閉じたりすることを繰り返している。

また、アジアを海の繋がりで考えることも重要である。朝貢という関係は、大陸部と半島と島が海で繋がっていることがその特徴である。陸と陸とを繋ぐ海は、一緒になるほどには接近しておらず、行き来がないほどには遠くない。その経済的地理的關係がアジアの相互関係をつくってきた。そういう点で、アジア、日中、日韓関係を議論するときには、海の観点をもっと議論していかなければいけない。

（文責 事務局）

